

『日本生産性本部』での日々

北海学園大学学長

(北海道生産性本部:平成29年4月顧問就任)

安酸 敏眞(やすかた・としまさ)氏

略歴:昭和27年鳥取県米子市生まれ。55年京都大学大学院文学研究科博士課程修了。60年ヴァンダービルト大学大学院修了。専門分野は、キリスト教学、西洋思想史。60年6月に日本生産性本部において嘱託勤務。62年10月盛岡大学助教授、平成5年4月聖学院大学人文学部助教授、8年4月同教授、16年4月北海学園大学人文学部教授を経て29年4月学長就任。この他、公益財団法人北海道新聞野生生物基金理事、北海道ユネスコ連絡協議会顧問、日本宗教学会評議員にご就任されています。



わたしの専門分野は「キリスト教思想史」であり、著訳書は単・共著含めて20冊くらいになる。しかしそのいずれの頁にも影を落としていない奇妙な経歴がある。一つ目は大学入学時に工学部合成化学科の学生であったが、卒業時には文学部哲学科の学生だったこと、二つ目はサラリーマン経験があり、しかも「日本生産性本部」(JPC)の嘱託職員だったことである。ここでは後者に絞って記してみたい。

日・米・独3カ国の大学・大学院で通算15年間学び、博士論文を完成させて1985年2月に凱旋帰国したものの、日本の大学のどこにも非常勤の口すら見つからなかった。仕方なく新聞の求人広告を見て赤坂見附の某国際交流事務所に着職したが、10日間ほどでそこを辞める羽目になった。5年間の外国暮らしで直截に自分の意見を述べる癖がついていたため、触れてはならぬオフィス内の暗黙事項に公然と触れたことが原因であった。身重の妻を抱えて路頭に迷った自分を救ってくれたのは、アメリカ留学時代の友人で、当時JICAの職員の末森満氏(現「国際ジャーナル社」社長)であった。彼はJPCのシンガポール協力室の谷口恒明課長と昵懇で、わたしの人柄と英語力を請け合せて、谷口氏に強く推薦してくれた。JPCは当時シンガポール関係の大型の国家プロジェクトを請け負っていたが、内部に英語の堪能な職員があまりいなかったために大きな失点を喫し、英語能力のあるスタッフの確保が急務となっていた。そこで渡りに船のような形で採用され、アメリカ人女性とペアを組み、複数の翻訳会社と多数の英語圏からの留学生を指揮して、英文のトレーニングマニュアルの作成に精を出した。自らは経済学

や経営学の専門知識を持ち合わせなかったが、自学自習とOJTで不足を補いながら、任された職務をそつなくこなしたと自負している。

在職中、当時名誉会長であった郷司浩平氏のお目に留まり、某大学への推薦状を書いていただいたりもしたが、残念ながら実を結ばず、そのままJPCで働き続けた。シンガポール協力室の隣にあったメンタルヘルス研究所の久保田浩也所長とも親しくなった。しかしのちにJPCの理事長にまで昇り詰められた直属の上司の谷口氏には、とくに可愛がっていただき、サラリーマンとしてのみならず、人間としてのイロハを教わった。谷口・末森両氏は、昨年わたしが学長に就任した際に、わざわざ東京で祝いの席を設けてくださった。

「生産性の三原則」とか「マズローの法則(欲求の五段階説)」などという、それまで知らなかった業界知識も摂取しながら、日本的経営のノーハウを人事考課、生産管理、経営管理などの具体的トピックに即して、わかり易い英語に翻訳することに苦心した二年半であったが、あのときのJPCでの経験は大学教員になってからも、とりわけ8000人規模の大学の学長に就任した今、とても役立っている。マネージメントはもとより、職場の人間環境やメンタルヘルスの問題などは、学長としてもまさに忽せにできない要事である。JPCを経由して大学教員になった者は結構いるが、学長になった者はあまりいないと思うので、異色のキャリアの持ち主として大学改革に尽力したいと念じている。